蕾の悦虐　くノ一版

遊かされたって口は割らない

原　案　ＷＩＬＬ様
小説化　濠門長恭

目次

捕縛……三
敲責……一二
色責……二〇
裸晒……三三
水責
木馬
馬曳
服毒
瘤鞭
蟲責
押送
後書き……一五四

注記

この小説はヒロイン一人称で書かれています。その為、本文中で時刻や度量衡の換算はしていません（ヒロインにそんな知識は無いですから）。なお、読者各位におかれまして単位換算をされるときは、有効数字の桁数に留意してください。

一寸は厳密には三・〇三センチですが、「一寸半」という表記は四・五四五センチではなく四・五プラスマイナス〇・三センチを意味します。

3.03×(1.4～1.6)＝4.24～4.84

四センは素敵だけど五センチは裂けちゃうという問題は……知らんがな。

十間は十八・一八ｍではなく二十ｍ弱です。

捕縛

異様な気配を感じて、すっと目が覚めた。忍びなら当然だ。
盗人や押込にしては、気配を見事に殺している。忍びにしては、足音を消し切れていないし息遣いも乱れている。
タヨ小母さんが身を起こして、障子の向こうに注意を凝らした。夜具にしている単衣の下から取り出した二尺五寸の直刀を握って、鯉口を切っている。
カタン。閂の外れる小さな音がして、雨戸が軋みながら開く。この気配は……
「しくじった。逃げるぞ」
障子を開けて幸兵衛小父さんが転がり込んできた。肩と脇腹に血が滲んでいる。
「ハル、仕事を申し付ける」
体術の稽古を受けているときよりも厳しい声。
「はいッ」
おれは起き上がって、片膝を突いた。
「なんとしても逃げ延びて、御館に注進するのじゃ。『武田より上杉に縁組の申し出有り』。けして間違えるでないぞ」
「はいッ」
おれは歳の割に機転が利くってんで、この務めを仰せつかったけど、武田と上杉の縁組

が一大事だとは、おれでなくても分かる。武田と上杉と北条の三家は、互いに争っている。そのうちの二つが仲良しになったら、北条家は両方から攻められて滅びてしまう。

ぴいんと全身が緊張した。それに気づいた小父さんが苦笑する。普段なら「忍びにあるまじきこと」と叱られている。

「捕らえられても自害はならぬ。なんとしても生きて御館にまで逃げ落ちよ」

小父さんは怪我をしている身ながら天井まで跳躍して、幾つかの品を投げ落とした。その中の小さな葛籠を背負った。それを見ていた小母さんは、腰巻を剥いで素裸になってから、同じように葛籠を背負った。元結を切って髪をざんばらにしたのは、裸になったのと同じ理由――敵の目を引き付けるためだ。

「小父さん……小母さん！」

あらかじめいろんな場面を考えて、このときにはこうすると定めてある。二人は囮になって、おれを逃がすつもりなのだ。それだけ追手は間近に迫っていて、しかも手強いということだ。

「今生の別れぞ。見事、風間忍びの務めを果たせ」

「はいッ」

おれ、さっきから同じ返事ばかりをしている。

おれもすぐに身支度を調えた。床に敷いて寝ていた単衣をきちんと着付けて、必須の品だけを入れた忍び袋を斜に背負って、部屋の中だけど草鞋を履いた。髪は肩で揃えた切禿（きりかむろ）だから、このままでいい。

おれは小間物商の幸兵衛とタヨ夫婦の姪ということになってるけど、実際は……そうじ

やないということしか知らない。元々のおれは捨て子だったらしい。風間忍びの誰かに拾われて、下忍として育てられて、二年前からは草として二人と一緒に暮らしてきた。ようやく辻髪を置いてからの二年間だから、すごく長くて楽しい日々だった。その人たちと今生では二度と会えないと思うと、不覚にも鼻の奥がツウンとしてくる。

「散ッ！」

小父さんの声で、おれは我に還った。

小父さんはわざと派手に雨戸を蹴破って裏庭へ出て、土塀を跳び越えた。小母さんは店表（たなおもて）へ向かった。おれは天井へ跳んだ。

表と裏の両方から、追手の叫び声と剣戟の響きが聞こえてくる。

「敵は手負いだ。殺すな、生け捕れ」

きいん、ばしん、かあん。

「うおおっ、素っ裸だぞ」

「目眩ましだ。気を奪われるな」

おれは風通しの窓に取り付いて、木格子を外して身体を押し込んだ。大人はもちろん、ちょっと体格の良い餓鬼でもつっかえるところだけど。おれは歳よりも一つ二つ幼く見られてしまう。いつもはそれで悔しい思いをしてきたけど、こういうときは得をする。

眼前の地上で、小母さんが十人ほどの追手に取り囲まれている。松明の灯りに白い裸身を浮かび上がらせて跳ねまわり、刺股や槍をかわしながら敵に手傷を追わせている。

逃げなくちゃいけないのに、思わず見惚れてしまった。それくらいに凄まじかった。美しかった。

けれど、多勢に無勢。ついに、投縄が小母さんの右腕に巻き付いた。小母さんが左手を背中へ回した。さらに何本もの投縄が小母さんの裸身に絡み付く。蜘蛛の巣に捉えられた蝶のように見えた。

その刹那。

ぐわわーん！

赤と黄色の混じった焔が噴き上がって、千切れた首や手足が飛び散った。

追手の中には何人か、柿渋染めの忍び衣装を身に着けたやつもいた。そいつらは咄嗟に顔を腕でかばって、目が眩むのを避けた。自爆ではなく火遁の術を疑っているんだろう、四方八方へ目を向ける。

まずい。見つかった。

「いたぞ、新手だ！」

窓から身体を引き抜いて屋根に跳び移ろうとしたけど、間に合わなかった。右の太腿に矢が突き刺さった。同時に、目潰しが顔に当たった。

「うわわっ……」

真っ逆さまに転落――なんかするもんか。物心つく前から里で鍛えられてきた体術が、自然と空中で受け身の体勢を取らせる。

けれど。地面に足が着く前に抱き止められてしまった。すかさず羽交い締めにされた。

「これは餓鬼（こわっぱ）、しかも娘じゃないか」

くそ。わざわざ股座（またぐら）を鷲掴みするなよ。けど、涙とくしゃみで、文句も言えない。

おれを抱き止めたやつは、陣羽織なんか着込んでる。侍大将にしては、ずいぶんと若い。

「これも何かの縁じゃ。俺が直々に取り調べてやろう」
勝手なことを言いながら、おれを地面に俯せに押さえ付けて、縄で縛ろうとする。
「お待ちあれ」
もう一人、陣羽織がいた。こっちは、幸兵衛小父さんより年を食ってる。
「この餓鬼も忍びなら、自害の怖れがありますぞ。まずは、それを封じねば」
そいつは、細い竹を一節の長さに切って縄を通して連ねたやつ、竹轡をおれの口に押し付けた。
今は逆らっても無駄だから、おとなしく咥えてやった。竹轡が頬を割るほど押し込まれて、首の後ろで括り合わされた。
「むうう……」
自害はしないんだから竹轡なんか、へっちゃらだ。うっかり余計なことを口走らずに済むから、ありがたいくらいだ。
「衣服のまま縛っても、縄脱けをされますぞ」
「ほお。そういうものか」
若いやつは、おれを押さえ付けたまま刀を抜いて、帯を切り落とした。そして、襟首をつかんで単衣を腕から引き抜いた。
おれは女の徴(しるし)がまだだから、腰巻祝をしていない。つまり、単衣を奪われたら素っ裸だ。おれは女忍びだから、素っ裸でも平気な振りができるし、羞ずかしがることだってできる。だけど、敵の手で裸にされると……悔しい。
あらためて腕を背中へねじ上げられて、手首を縛られた。だけじゃなくて、二の腕を縛

られ、その縄で胸をぐるぐる巻きにされた。忍びの緊縛術に比べるとごちゃごちゃしてるくせに隙だらけ。縛られるときに手首を縦に重ねたのにも気づいていない。
とはいえ、これだけまわりに人がいちゃあ、縄脱けなんかできないや。
若いやつは、おれを縛っている縄をつかんで、強引に立たせやがった。
「そら、歩け。牢屋敷に引き据えて、じっくりと話を聞かせてもらうぞ」
小突かれて。それまでは忘れていた太腿の矢が、おれに噛みついてきた。
「あう……」
がくっと膝をついて、そのまま立てなくなった。立って歩いたら敵の館に近づくだけだから、無理して立とうとも思わない。
「こっちも向こうも、跡始末に手間取りそうですな。今のうちに、こやつの矢傷を手当してやりましょう」
跡始末というのは、小父さんと小母さんの欠片を拾い集めることだろう。
「医師がおらんぞ」
「それがしに、いささかの心得があり申す」
「ふむ……」
年かさの陣羽織は松明を持ってこさせた。
「そのまま、餓鬼を押さえていてくれ。暴れられては面倒じゃ」
矢は右の太腿の外側に突き刺さっている。おれは左を下にして横向きに転がされた。胴丸鎧の雑兵がおれの腰と脚を押さえ付けた。こいつ、手をもぞもぞさせてやがる。女の柔肌を愉しんでるつもりか。おれ、まだ（見掛けは）餓鬼だぞ。

年かさのほうの陣羽織のやつ（ああ、面倒くせえ。爺いでいいや）が、無造作に矢を引き抜いた。細い尖根（とがりね）の鏃だったから、すんなり抜けてくれて、そんなに痛くもなかったんだけど。爺いのやつ、鏃を松明で焙って……

「んんんーっ」

薄く煙を吹いている鏃をおれの傷口に近づける。やめろ、いやだよ……

じゅうっ……元の傷より深いくらいまで、突き刺しやがった。

「うあああああっ……いあい、あうい！」

実は我慢できたけど、餓鬼っぽく振る舞って敵を油断させたほうが得策だと思ったので、思い切り泣き叫んでやった。

「気が早いな。甚振るのは館へ連れ帰ってからで良かろう」

「これは、したり。傷口は焼いておかぬと毒の風が入って、命に関わりかねますぞ。ケンゴ殿はご存知ないか」

「いや、初耳だ。矢傷刀傷はずいぶんと見ておるが、金創医がこのような手当をするのは、見たことがない」

「はっ、あやつらは揃いもそろって大藪でござるわ」

爺いも大藪も、どっちもどっちだけど。そうか、おれをすぐには殺さないんだ。よし、なんとしても隙を見つけて（無ければ作って）逃げ出してやる。

焼いてふさいだ傷は、おれの単衣を裂いた細布で包み縛られた。

「これでは、ろくに歩けそうもないな」

ケンゴと呼ばれた若いやつは、憂い顔でおれを見下ろした。歳の頃は二十くらい。なか

なかの美丈夫というには、少し華奢かな。あと五年もしたら、似合いの若夫婦……なんでもない。

ケンゴが、槍を持った足軽を呼び寄せた。おれを地べたに座らせると、ぐるぐる巻きにされている二の腕を石突でこじて、腋の下に槍の柄を突き通した。

足軽が二人掛りで柄を担ぎ上げると、おれの身体は宙に浮いた。歩かなくていいから楽チンだけど、なんだか悔しい。それよりも、腕が「く」の字に折れて、かえって肩が痛い。おれが身体をくねらせて、きっちり縛らせなかった報いだ。くそお。

「おら、じっとしてろや。担ぎにくくてしょうがねえやな」

「こやつは敵方の賊じゃ。こっちの注文通りにはなるまい」

ケンゴが投縄を手に、おれの前に立った。おれの足をつかんで引き上げ、足首を槍の柄に結わえ付けた。

逆らっても無駄だし、警戒させるだけだから、おれは仕留められた獣みたいに、されるがままになっている。けど、本気で羞ずかしい。身体を二つに折られて、両脚を逆八の字に開かされて、しかもおれ素っ裸なんだぞ。

恥ずかし毛は生えてないが、おれの於女子（おめこ）は、他の子みたいな一本筋じゃない。くノ一の術を習うときに、幸兵衛小父さんにもタヨ小母さんにも、舐められたり吸われたり、他にもあれこれされてさせられて。されてないのは、於女子に於珍宝（おちんぽ）を挿れることくらいかな。だから脚を閉じていても、小さな肉襞が（ちょっぴりだけど）はみ出てる。

つまり、おれはそれだけ熟れてるってことだから、くノ一としては自慢できることだけど……敵に見られるのは悔しいし羞ずかしい。

「よっこらせ」
おれの気持ちなんか知らず、二人の足軽がおれを担ぎ直した。悔しいけど、腋の下だけで吊るされるよりは、楽だ。
騒動を知られたくないんだろう。二十人を超える一団は松明を消して、夜目の利く忍びを先に配して、城への道をひたひたと進む。おかげで、おれの裸は前後の雑兵どもにしか見られずに済んだ。

隊列は途中で二手に分かれて、おれは街外れに近い牢屋敷へ運び込まれた。捕まった忍びを待ち受けているのは、身の毛もよだつ凄まじい拷問と、全てを吐かされてから与えられる残酷な処刑。
くじけるもんか。隙を見つけて逃げてやる。だけど……実は困ってるんだ。
運ばれながら考えてたんだけど、ケンゴってやつはもしかして杉下謙吾じゃないだろうか。元の名は坂下正吾。主君の上杉謙信から姓名に一文字ずつを賜った。くらいだから、主君の情人だ。陣羽織の爺いも、歳が倍半分以上の若造に丁重な態度だったし。
そんなやつが、なんで忍び狩の指揮を執ってたかは知らないけど。つまりは、男同士の衆道だろ。くノ一の術で誑かすのは難しいんじゃないかな。
如何にして務めを果たすか。それを考えているせいだろうか。小父さんも小母さんも、こいつらに殺されたっていうのに、そんなに悲しくもないし、こいつらが憎くてたまらないってほどでもない。
常に心を平らかにして、おのれを他人の目で眺める。おれって、ちゃんと忍びの心構え

が身に沁みている……んじゃなくて、目の前で小母さんが木っ端微塵になったんだ。小父さんも吹っ飛んでる。その衝撃で心が麻痺してるのかもしれない。

敲責

おれは牢屋に放り込まれるんじゃなくて、センサク所とかいう小屋へ運び入れられた。中の道具立てを見ると拷問部屋だ。センサクは穿鑿か詮索と書くんだろう。

磔台、十露盤と石板、三角木馬、水責めの大樽、吊り滑車……どれもこれも、風間の里で見たことがある。まだ身体が出来てないってんで、本格の責めに耐える修練は免除されていたけど、ちょこっとだけは験(ため)させられた。

だからってわけじゃないけど、里では悪餓鬼への脅し文句は「十露盤に座らせるぞ」だし、女の子だったら「三角木馬に乗せましょうか」だったりする。

験しだけでたいていの子が泣き喚いた拷問が、今度は本気で、おれの華奢な身体に加えられるんだ。験しのときには耐え抜いて小頭に誉められたけど……今度は絶対に泣き叫んでしまうだろうな。考えるだけで、胸いっぱいにどす黒い恐怖が膨れ上がる。

――土を踏み固めた土間に、おれは投げ出された。すとんと落とされて、腰を打ったし矢傷にも響いた。

いったんは縄を解かれたけど、すぐに両手を前で縛り合わされて、滑車から垂れる鎖につながれた。

ヂャララ。鎖を手繰られて、否応なしに爪先立ちにさせられた。
謙吾がおれの前に立った。爺いは少し下がって、お手並み拝見みたいな感じ。二人とも陣羽織は脱いでいる。
この小屋には他にも二人、こいつらは雑用（おれを縛ったり吊し上げたり）手伝の雑兵どもだけど、素裸を晒しているおれにとっては、凶悪な男……ええい、なに弱気になってるんだ。素裸を武器にするのがくノ一じゃないか。
「自害はせぬ、舌は噛まぬと約束してくれるか？」
謙吾が腰を屈めておれと同じ目の高さで、言葉柔らかく尋ねてきた。猫撫で声とか餓鬼をあやすって感じじゃなくて、好いた女子に（じゃなくて、稚児にかな）向かっての物言いみたい。
これは……くノ一の術が効くかもしれない。ので、素直に頷いておいた。幸兵衛小父さんの厳命があるから、自害するつもりなんか、端っから無いぜ。
竹轡を外してもらって。すぐに後悔した。
「おまえは、どこの誰だ」
忍びは名前も雇い主も一切明かさずに死んでいくのが定め。けれど、草は表の顔を晒して生きている。
「おれはハル。小間物屋幸兵衛は、おれの父親の兄貴じゃ」
「おまえの歳は？」
こっちは、まったくのほんとうを答えたのに、疑わしそうな顔をされた。くそ、チビだけど体術は歳上の男の子にだって負けないし、くノ一の術はタヨ小母さんの折り紙付きだ

ぞ――なんてことは言えない。
「幸兵衛夫婦は、実は北条家の草じゃ。このことは知っておったろうな」
「知らん」
間髪を入れずに返事をしたのはしくじりだった。
「ほお。草の何たるかは知っておるのか。つまりは、おまえも草であるな」
しまった。うろたえて、打ち消す言葉が我ながら白々しくなってしまう。
「違う……」
「幸兵衛夫婦は我が身を囮にしてまで、おまえを逃がそうとした。よほどに重要な仕事を言いつけたのであろうな」
おれの言い分は無視して、たたみかけてくる。言葉を封じられていたら、答に窮しないで済むのに。
「押し問答をしていても埒は明きますまい。身体に聞くのが一番ですぞ」
爺いが無分別なことを言う。どんなに拷問されたって、忍びは絶対に口を割らない。そんなことも知らないのか。いや、知ってた。
「一人前の忍びなら、たとえ殺されても口を割りますまいが、こやつは餓鬼。ちょっと痛めつけてやれば屈服しましょう」
やれるもんなら、やってみろ――というのは、強がりに過ぎない。おれはまだ、痛いのや苦しいのに耐える修練はしていない。体術で痛い目に遭ったりするのは慣れっこだけど。
「されど、餓鬼なだけに……あまり手酷く打ち敲いては、殺してしまいかねん」
敵に温情なんか掛けられたくはないけど……手加減してほしいってのが本音かな。

「なに、本気で打ち敲いても、それほどは堪えぬ得物を用いればよろしいでしょう」
そんなことをほざいて爺いが手に取ったのは、径が一寸ほどの青竹だった。壁際に転がっていた鉈で二尺余に切り詰めて。一尺五寸ほどは十文字に割った。
「これならば……」
爺いがゆっくりと竹竿を振りかぶって、謙吾の二の腕を力一杯（に見えた）敲いた。
ばっちいん！
謙吾はけろりとしている。
「なるほど。これなら、餓鬼相手にも手加減は要らぬな。もっとも……」
竹竿を受け取った謙吾が、瞬息の動きで爺いの股間を斬り上げた。が、竿の先は袴の五分ほど手前、ちょうど金玉の高さでピタリと止まった。こいつ、剣術遣いだ。
「急所を打てば、その限りでもなかろうが……いや、小娘にはふぐりなど無かったな」
おれを振り返ると、竹竿の先で股座をつつきやがった。
金玉は無くても、敲かれたらすごく痛いんだぞ。あ、そうだ。
「お侍様……ひどいことはしないでください」
嘘泣き声で油断を誘ってみた。
「幸兵衛に何を命じられたか、素直に吐けば非道はせぬぞ。ん……？」
竹の先を股座に押し込んでくる。
ぎゅっと腿を閉じ合わせたけど、ぐりぐりと捻じ入れてきやがる。か弱い小娘らしく腿の力を抜いて、好きにさせた。
竹竿が後ろまで突き抜けた。謙吾は両端を持って、捻じりながら於女子に食い込ませて

くる。
竹を十文字に裂いた縁が当たって、ちりちりと痛い。けど、股座の奥がじわあっとぬかるんでくる。くノ一の術を習って女として目覚めてるせいだ。
どうしよう。また、それを考えた。おれが餓鬼ながらに忍びだとは、もうばれている。だけど、於女子で於珍宝を翻弄するくノ一だとまでは疑ってないかもしれない。「ああん」くらいは鼻声を出したほうがいいのか、単純に痛がってるほうがいいのか。判断に迷っているうちに。
「強情だな。致し方ない。ひどいことをしてやろう」
謙吾はおれの股間から竹竿を引き抜いて、背後へまわった。
竹竿を振りかぶる気配。びゅんっと、凄まじい風切音。
ばっちいん！
「くっ……」
尻を敲かれたけど、音のわりには痛くなかった。おれと同じ年頃の男の子でも悲鳴を上げる痛さだろうけど、体術の稽古で半止め（寸止めしてくれないけど、打ち抜きもしない）を喰らってきたおれなら……
「きゃああっ、痛い」
「無理に悲鳴を作らなくてもよいぞ」
敲かれたのと悲鳴との間に生じた一拍の遅れを見破られてしまった。
ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！
立て続けに尻を敲かれた。今さら白々しい芝居をするのも馬鹿らしくて、おれは黙って

耐えるほうを選んだ。
ばちいん！
「くう……」
肩を敲かれると、骨に響いて尻よりも痛い。
ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！
ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！　ばちいん！
肩から背中にかけて滅多打ち。だけど、なんのかんの言いながら手加減してくれている。敲いた瞬間に手首を返しているのが、その証拠。これが竹竿でなく刀だったら、肉は斬るけど骨までは断ち割っていない。
「まだ情けを掛けてやっているうちに白状するが、身のためだぞ」
謙吾が正面に戻ってきて。竹竿の先を腹に突き入れた。ぐうっと押し込みながら、ぐりぐりと捻じる。
「くっ……くううう」
敲かれるより堪える。痛いんじゃなくて、気持ちが悪くなる。
「ほお。いささか音色が変わったな」
竹竿が引かれて。
ぶゅん、ばっちいいん！
「ひぎゃっ……」
胸を真横に薙ぎ払われて、不覚にも本物の悲鳴を漏らしてしまった。竹竿だから、ちんまりと膨らんでいるお乳がひしゃげただけで済んだけど、真剣だったら肋骨を断たれてい

ただろう。
ぶゅん、ばっちいいん！　ぶゅん、ばっちいいん！
二発三発と喰らって、もしかして肋骨にひびが入ったかと思うくらいに痛い。
「杉下殿。いくら餓鬼相手とはいえ、慈悲が過ぎましょうぞ」
爺いが謙吾の手を止めさせた。雑兵に命じて、おれの足首を別々の縄で縛らせた。小屋の両端に立てられている柱に縄を巻いて引っ張られると――抗いようのない力で、おれの脚が大きく開く。
「さて。何も無いところを打ち敲いて、どれだけ効き目があるかな」
あるよ。だから、やめてくれよ。
「白状する気になったら、そう言え」
謙吾が竹竿を下段に構える。
白状なんかするもんか。それとも、適当な嘘をついて……でも、それを信用されたら、おれは用済みとなって、殺されるかもしれない。
迷っているうちに、竹竿で股間を斬り上げられた。
ばしいん！
「きひいいいっ……」
目の前に小さな火花が散った。激痛が股間から背骨に突き抜ける。今までで、いちばん痛かった。
なのに……
「たいして効いておらぬようですな。得物を替えましょう」

爺いが縄束を手に取った。緩く巻いて、根元を結び留めてある。それを、大樽に突っ込んでたっぷりと水を吸わせる。

「これは生半な木刀よりも痛いぞ。しかも存分に撓るから、股座の奥の奥まで抉る。男なら一撃で悶絶するのだぞ」

言葉で脅しながら、ぴたぴたと縄束を於女子に打ちつける。冷たくて気持ち悪い。

嘘の自白をするのもためらわれるし、だいいち嘘の種を思いつかない。

もう、こうなったら……二度三度と敲かれないで済むように、一撃で悶絶することを願うしかない。まさか、死なないよな？

「気丈なやつめ。睨み返してきおるわ」

わざわざ敵意を煽るような真似をした覚えはないけど、決意が自然と目にも表われたんだろう。

「よかろう。この大岡左内の渾身の一撃を女の根元（こんげん）で受け止めてみよ」

左内は縄束をぐうっと後ろへ引いて……ぶりゅんん、ずばっぢゃあん！

「ぎゃあああっ……！！」

於女子が砕け散ったような激痛。目の前が真っ赤に染まって、ふうっと暗くなっていった。

色責

望み通りに一撃で悶絶したけど、それで拷問をやめてくれるほど敵はお人好しじゃなかった。

「ごほ……けふっ、けふん」

喉が灼けて鼻が痛くて目が沁みて……おれは安らかな眠りから拷問の場へ引きずり戻された。鼻の下の小さな皿から、もうもうと煙が立ち昇っている。松葉を燻してやがる。

「いやだ……もう赦して……」

誰だよ、すすり泣きながら敵に慈悲を願っているやつは。くそ、しゃんとしろ。餓鬼向けに手加減された拷問くらいで根を上げる玉じゃないだろ、風間忍びのハルは。

「いやだ……もう於女子は敲かないでよお」

まだ言ってやがる。でも、言ってみるもんだ。

「よしよし。もう痛いことはせぬぞ」

耳元に囁かれる猫撫で声。

騙されるもんかと思ったけど。おれは床に下ろされて、手首の縄もほどいてもらえた。でもすぐに。壁に立てかけてある梯子に手足を伸ばした形で縛り付けられた。

「もうしないって言ったくせに……」

猫撫で声に、おれもついつい甘えちまった。

「武士に二言は無い。今日はもう痛いことはせぬ」
明日は、今日よりもっと痛いことをするんだ。おれは不貞腐れた気分になったんだけど。
「これからは愉しいことをしてやる」
雑兵の手で、おれを縛り付けた梯子が上下逆にひっくり返された。けど、緩い斜めにされたので、苦しいという感じは無かった。
「幸兵衛から何を言いつかったか、教えてくれぬか」
謙吾はおれの横に座り込んで耳元に囁きながら、胸に手を這わした。土をほじるように指を動かして、すぐに止めた。きっと乳の膨らみを悪戯しようとしたんだろう。残念だったな。おれの胸は掌で包めるほど膨らんでないぜ。なんて、威張れることじゃないや。
「あっ……」
びくんと身体が跳ねた。膨らんでないとは言ったけど、乳首のまわりは盃を伏せたくらいに盛り上がってる。そこを指で強く摘まれて、小さな雷に打たれたみたいな痛みが走った。
「ふむ。男に比べると格段に敏感だな」
男なんかと比べるって――おれをわざと辱めてるんだろうか。
「ここも、そうかな」
わずかな膨らみの上を指が滑って……
「ひゃんっ……」
乳首を摘まれた。びりびりっと、稲妻みたいなぎざぎざの鋭い、でも痛いんじゃなくてくすぐったい感じが胸を奔り抜けた。

くそ……乳をどうこうされたくらいで感じるんじゃない。心を鎮めて、餓鬼の乳を弄んで悦に入っている阿呆の顔を見詰めるんだ。嘲笑ってやれ。

もう片方の乳首も摘まれた。

「ひゃ……」

駄目だ。くノ一の術を使えない。実の親（は知らないけど）みたいな小父さんや小母さんにされるのとは違って、相手が男だってことが、おれは女だってことが、心の真ん中に居座ってやがる。

「幸兵衛が探り当てたのは、武田からの縁組申し出であろう。どこまで知っておる？」

くそ、逆だぞ。女が男に色仕掛けで話を聞き出すのがくノ一だ。男が女に色仕掛けなんて……

「ひゃうんっ……」

乳首を親指と中指で摘まれて、その天辺を人差し指の腹でくすぐられて、また不本意な声を漏らしてしまった。触られてるのは乳首なのに、於女子の奥が熱くなってくる。

「これでは足りぬか。では、こうしてくれるぞ」

左の乳首から謙吾の指が離れて、つううっと肌を下に滑った。於女子を指で割って――こういうとき、男は穴の中にまで指を挿れてくると教わってるけど、こいつは違った。割れ目の浅いところを下から上にほじくるようにして……

「あっ……」

割れ目の上端に隠れている雛先（ひなさき）を簡単に探り当てやがった。やめろ。そこは弄らないでくれ……おれ、おかしくなっちゃう。

「話には聞いていたが、なるほど。これが女魔羅（めまら）という物か。豆粒みたいだが、たしかに魔羅と似ておる。ならば、扱いも同じでよかろう」
雛先をつままれて、皮の中に隠れている実核（さねね）をくにゅんと身体の中へ押し込まれた。
「いやっ……」
甘ったるい爆発が、雛先から腰の奥に向かって突き抜けた。
くにゅん、くりゅん、にゅろん……微妙に指遣いを変えて、何度も押し込まれる。
「いやっ……くうん……やめて……」
くそ。これも乳首と同じだ。小父さんにされるより、ずっと気持ち好い。女忍びがくノ一の術に翻弄されるなんて……じゃなくて。こいつのは衆道の術だ。殿様に弄られてるのか殿様に奉仕してるのか、それで覚えたんだろう。どっちにしても、おれは我が身が情けない。でも、気持ち好いよお。
「武田との縁組など、どこに知られても構わぬ。もはや七分までは固まっておる……実に無念ではあるがな」
最後のほうは意味が分からなかったけど。考えてみたら、おれが何を言いつかったかを知られたところで、構わないんじゃないだろうか。捕らえられていては、どうせ務めを果たせない。
「言え。白状してしまえ。おまえは、まだ頑是ない餓鬼。素直に吐けば、解き放ってやっても良いのだぞ」
騙されるもんかと思いながら、心が揺れる。
謙吾が雛先から指を放して、その指をぺろぺろ舐める。おれの不浄を触った指を、平気

で舐めている。なんだか、おれがいけないことをしてるみたいな気分になっちまった。
たっぷりと唾をまぶした指が、また雛先に近づいて。
「ひゃんんっ……」
くるんと皮を剥かれて、実核をつままれた。濡れた指で実核をうにゅうにゅとしごかれて、立て続けに甘い爆発が起きる。
くそ。負けるもんか。くノ一の術を思い出せ。
かんじーざいぼーさーつ、ぎょうじんはんにゃーはーらみーたじー
心の中で御経を唱えて、お寺に祀られてる仏様の御尊顔を思い浮かべる。
「幸兵衛が探り当てたのは、武田からの縁組申し出であろう。違うか？」
しきそくぜーくう、くう、くううううう……たけだよりうえすぎに……ふーしょうふーめつ、えんぐみのー
「申し出有り。武田より上杉に縁組の申し出有り」
いつの間にか言葉にしちまってた。
「やはり、そうであったか」
耳が、わあんとなるほどの大声。雛先を責めていた指の動きが、ぴたっと止まった。
「何か証拠の書状は入手しておるのか。仲間に渡したのか」
また耳元に囁かれる。まだ雛先を摘まんでいた指が、あわあわと動き始める。
おれ、気持ち好いのに負けたわけじゃないぞ。何もかも白状したって、風間にも上杉の殿様にも迷惑は掛からないって、ちゃんと考えた上での判断だ。
「おれが言いつかったのは、さっきの伝言だけだ。仲間なんかいない」

「嘘をつくと容赦はせんぞ」
また乳首を摘ままれたと思った刹那。爪を立てられて、ぎちぎちと捻じられた。
「きひいいいっ……痛い。嘘じゃない。ほんとのことを言ったんだから、赦してくれよ。解き放ってくれよおお」
「北条にとって上杉は不倶戴天の敵。しょぼくれた夫婦と餓鬼だけで探っているはずがなかろう」
謙吾の右手も胸に移ってきて、二つの手で双つの乳首を責められる。
「痛い……知らないんだよ。他に草が潜んでたとしても、そんなことまでは分からない仕組になってるんだ」
「それでは、いざというときに扶け合うことも出来まい。仲間を見分ける合言葉のようなものがあるはずだ」
くそ……鋭い。だけど、ほんとにこれだけは白状するわけにはいかない。たとえ殺されたって、仲間を売ることなんてできない。もしも仲間を売って、おれだけは見逃してもらえたとしても……裏切者は地の果てまでも追われて、一寸刻みの嬲り殺しにされる。里でおれを育ててくれた源爺とツル婆まで連座させられる。小頭もただではすまない。
「急にだんまりか。やはり、何かを隠しておるな」
「知らない。隠してない。武田より上杉に縁組の申し出有り。これを御館に注進する。おれが言いつかったのは、それだけだ」
「御館とは、どこの御館じゃ？」
それを白状しても、仲間を裏切ることになるんだろうか。くそ……もう、何も答えない

ぞ。
「言え。言わぬと……」
謙吾の右手が、また雛先に戻ってきた。すっかり縮こまってるのに無理繰(むりくり)に皮を剥いて実核に爪を立てた。
「女魔羅を抓られる痛さは乳首どころではないぞ」
たとえ拷問に耐える修練は積んでいなくても。おれだって風間忍びだ。これしきのことで音を上げてたまるもんか。
突き刺すような激痛。ぎりりっと捻じられて、悲鳴が喉の奥で膨れ上がった。風間の女忍び、くノ一の術に懸けて堪えようとしたけど、相手もおれが泣き叫ぶまで赦してくれない。
「左内殿、手伝ってくれい」
爺いが謙吾の反対側から、乳首を二つともに抓った。
「こうしてやりましょうぞ」
乳首でおれを吊り上げようとする。それを見て謙吾も雛先を引っ張る。
「痛い痛い……赦して。おれ、ほんとに何も……うぎゃあああっ！」
「ええくそ」
謙吾が根負けして指を放してくれた。爺いもチッと舌打ちして、身体を起こす。
激痛が去ると。乳首も雛先もじんじんと疼いて、くそ……なんだか甘く痺れちまってる。
「強情な小娘じゃな。餓鬼と見くびっておったわい」
謙吾がため息をついた。が、すぐに残忍な表情を浮かべる。

「このうえは、本格の責めに掛けてくれよう。窮鳥懐に入らば、煮て食おうと焼いて食おうと、意のままよ。目玉を刳り貫いてやろうか、鼻を削ぎ落としてやろうか」
「それは、なりませぬぞ」
おれがびっくりしたくらいに厳しい声だった。
「罪人の調べに当たっては、後に無実が判明する場合がござる。取り返しのつかぬ仕打ちは、きちんと裁きが下ってからのこと。裁き云々はこの者には当てはまりませぬが、それでも、寝返らせて我らの駒に使えるかもしれません。いずれにせよ、身体に欠損を生ぜしめるのは拷問としても非常の最後の手段でござる」
「四角四面じゃの。我らが殿はいささか律儀にすぎる面があるが……他国でも、そうなのか」
「人の道に国の違いはありませんぞ」
「人ならざる大岡左内が、人の道を説くのか」
「この餓鬼も人に非ず。見くびっておりましたが、なかなかに性根の座った忍びにござる。されば、目を潰そうと片腕叩っ斬ろうと白状はせぬでしょう。必要とあらば何度でも繰り返せるのが拷問。無駄に切札を捨てるのは愚策というもの」
こいつの言ってることは難しくて分かりにくいけど、つまり、謙吾が言ったような取り返しのつかぬ仕打ちは、当面はされずに済むってことだ。
「では、煮て食うのはやめておくとして。女子（おなご）には格別に効く責めがあったな」
「くノ一の術と称して、女忍びはその修行も積んでおります。失礼だが、新鉢（あらはち）ならぬ新筆には荷が重いかと」

莫迦にしたような言い方をされても、謙吾は平気みたいだった。
「ふん。ならば、勝手知ったる方で責めてみるか。こっちには、男も女もあるまい」
縄を解かれて梯子から降ろされたけど、すぐに縛り直された。正座させられてから前に突き倒されて、右手と右足首、左手と左足首をひとまとめに括られた。膝と肩で身体を支えて、尻をうんと高く突き出した……これ、かなり羞ずかしい形だ。後ろに立たれると、於女子も尻穴も丸見え。五つ六つならともかく、おれくらいの女の子ならじゅうぶんにそれを分かって、泣くか喚くか身悶えするか。でも、おれはくノ一の術を（せいぜい取っ掛かりくらいだけど）修めた女忍びだ。羞ずかしくても、それを押し殺せる。
謙吾のやつ、おれを見下ろしながら衣服を脱ぎ捨てた。下帯まで外して、素っ裸。うわ……於珍宝が擂粉木みたいに太くなってそっくり返ってやがる。餓鬼の裸を見て勃起させるなんて、とんだ変態野郎だ。
「ふむ。こうして見ると、稚児の裸とあまり変わらんな。尻が丸っこいから、こちらのほうがそそられるくらいだ」
そうか。こいつ、元々は上杉の殿様のお稚児さんで、今は逆に稚児を可愛がってるんだろう。おれ、まだまだ女の身体になってないから――股座さえ見なけりゃ、稚児とあまり変わりないってことか。
あ……もしかして。勝手知ったる方ってのは……しめた、くノ一の術が使えるぞ。於女子は未通女（おぼこ）のほうが、奥向きに下女として潜り込むとか、偉い侍の側室になるとか、使い勝手が良いから手付かずだけど、尻穴と口は一通りの修練を積んでる。
謙吾は、すぐにはおれを犯そうとはせずに、小屋の中を見回していた。

「おや、これは？」
壁の一面には、鞭とか木刀とか矢床（やっとこ）とか鉄枷とか鎖とか――拷問に使う道具が並べられている。謙吾は、細い柄が突き出た竹筒を手に取った。
「竜吐水ではないか。なぜ、斯様な物が？」
「口を封じて鼻の穴から水を入れてやれば、大樽とはまた異なる水責めになりますな。杉下殿がお考えの使い道としても、五度十度と注いで栓をすれば、これも立派に拷問」
「なるほど。これは是非にでも、水責めまで小娘に強情を張り通してもらいたいものだな」
謙吾が淫らっぽい薄笑いを浮かべる。美男子が一瞬、悪鬼羅刹に変貌した。
おれだって、竜吐水くらい知ってる。こっちじゃ見掛けないが、里では餓鬼の玩具だった。竹筒に水を満たして後ろの柄を押すと、竹の節に小さな穴を明けてある前から勢いよく水が吹き出る。南蛮渡来の鉄砲に似てるってんで、近頃じゃ水鉄砲とも言われてる。
この竜吐水は水の吹き出す側にも細い竹管が付けてある。左内が言っていた、鼻に突っ込むための工夫だろう。
「これがここにあるとは、まさしく天の配剤だな」
謙吾は大樽の水を竜吐水に満たして、おれの後ろで片膝を突いて……
「えっ……！？」
竹筒の先を尻穴にねじ込みやがった。
ずちゅうう……水が腹の中に押し入ってくる。
あ、そうか。これ、尻穴を使う前の掃除だ。おれが教わったのは、細い棒に布を巻き付けて汚れを掻き取るやり方だったけど、このほうが痛くないし綺麗になる……けれど。入

れた水は出さなきゃならないぞ。おれ、こんな形で縛られてるってのに。これじゃ、おれ自身が生きた竜吐水になっちまうぜ。
「やめろ……粗相はしたくねえよ」
「心配するな。ちゃんと考えてある」
「……」
そうだ。これも拷問だった。色責めだけじゃなく羞恥責めにもなる一石二鳥だ。窮鳥としては堪ったもんじゃないけど。
竜吐水の水を入れ終わって、でも終わりにならなかった。二回三回と入れられる。
お腹が重たい。ぎゅっと尻穴を引き締めていないと、漏らすっていうか噴き出しそうだ。
謙吾が手桶を持ってきて、おれの尻にあてがった。
「遠慮は要らんぞ。さっさとひり出してしまえ」
くそ。いくら女忍びだって、糞小便を見られるのは羞ずかしい。けど、同い年の娘っ子だったら、どうかな。羞ずかしくても我慢はしないんじゃないかな。
女忍びだってばれてるけど、ふつうの娘らしくしてたほうが、くノ一の術に掛けやすいかな。ばれてるからには無駄かな。矢傷なんかへっちゃらだし、敲かれた痛みも引いて、雛先を虐められた余韻も消えたけど……腹が苦しくて、考えがまとまらない。ので、考えないことにした。
ぶじゅうううう、ぱしゃしゃしゃ……
水音が羞ずかしいけど、すごく楽になった。ひと仕事やっつけたみたいな気分。でも、仕事はまだ始まってもいない。どころか。またすぐに水を入れられた。今度は一回きりだ

った。
「清水になったな」
謙吾は、尻のまわりの汚れを藁屑で拭き取ってから。尻穴に指の腹を押し付けて、ぐねぐねと揉みほぐしにかかった。
「んん……意外とこなれておるな」
「くノ一であれば、三つの穴ともに鍛えておりましょうよ」
女穴だけはまだだぞって言い返してやりたいけど、そしたら他の二つを認めたことになっちまう。ので、黙って好き勝手にさせといた。ら……つぷっと指を突き立てて。
「あ……こら、やめろ」
指を二本にして、中でチョキみたいに広げやがった。さすがに、少し（だけ）痛いぞ。
「これだけこなれておれば、おまえもさぞや愉しめるであろうな」
勝手なことをほざいて、おれの腰を両手でつかむと、擂粉木みたいになった於珍宝を尻穴に押し付けてきて。
ずぶうっと、一気に突き挿れやがった。
「はああっ……」
痛くないように、尻穴の力を抜いて大きく息を吐いた。尻穴を鍛えてるって、ばれたも同然なんだから初心（うぶ）を装わなくてもいい。
どころか。奥まで挿入（はい）ってきたところで、尻穴をきゅっと締めてやった。
「お……なかなかに慣れておるな」
のは、謙吾も同じ。ずぬうっと引き抜きかけて、雁首のところで止めて、小刻みに突い

てくる。これ、男もいちばん気持ち好いけれど、おれも穴の縁を刺激されて……くそ、幸兵衛小父より上手いぞ。

もっと激しく掻き回してほしい。そのもどかしさが尻穴よりも於女子の中にわだかまっていって、破裂したら凄いんだろうなという予感が、全身に満ちてくる。

くそ、負けるもんか。相手の突きに合わせて尻穴を締めたり、尻全体を上下左右に揺すって於珍宝全体をしごいてやったり。

「おおお、堪らんぞ」

なんて言ってるけど。やたらと下から突き上げるような動きで、於女子の裏側をこすってくる。その動きが、ちょこっとだけ雛先にまで伝わって、ちょっぴり気持ち好い。でも、もどかしい。

「うん……？　ここは、どうだ」

ここもそこも、ちっとも違わない。

「股座だけではなく、腹の中も男女で異なっておるのか」

謙吾が分かりきったことを呟いた。当たり前だろ。女は於女子だって腹ん中だし、その奥には子袋だってあるんだ。男は……どうなってるか知らないけど。

そんな小競り合いが四半時ちかく続いた。

おれは、もどかしさがどんどん募ってくるけど、最後のひと突きが無くて。もどかしさの仕返しに、うんと激しく、つかんでいる手を振り切って、腰をぐにいんぐにいんと揺すって「い」の字や「ろ」の字を書いてやった。幸兵衛小父の口伝と、タヨ小母さんの腰相伝だい。

「うおお……こら、やめろ」
やめるもんか。風間忍法くノ一の術、杉下謙吾を討ち取ったりい。

おれも初めての闘いで舞い上がってたよな。くノ一の術で男を手玉に取ったところで、逃げられるわけじゃなし。
でも、男ってやつは精を放つと虚脱するので。これ以上の拷問は明日からということにしてくれたから、儲けものだったかな。明日が怖いけど。
「明日からは、餓鬼だとて容赦はせんぞ。覚悟しておけよ」
餓鬼に精を搾り取られた負け惜しみにしか聞こえない。
だけど、負け惜しみは口だけにしといてくれよ。おれは素っ裸のままで、小屋の隅に木格子で囲まれた狭い檻に閉じ込められた。天井から垂れた鎖に両手を鉄枷でつながれて、横になることも出来ない。座ったままで（子の刻過ぎまで責められてたから）半夜を過ごさなければならなかった。すでに皐月も半ばで、真夜中でもまったく冷え込まなかったのが、せめてもの救いだったかな。

裸晒

眠れるはずもない夜を過ごして、明け方には一刻くらいはうとうとしてた。眠ってはいない。目を閉じているうちに眠りの沼に溺れかけては、腕を吊られている肩の痛みとか、

今さらに甦る矢傷の疼きとかで引き戻される。それの繰り返し。
やがて夜が明けて。あちこちで人の気配が立って、それからさらに一刻ほども過ぎてから、謙吾と左内がおれを甚振りにやって来た。雑兵ではなく、牢役人やその下人らしいのを何人も引き連れている。
おれは狭い檻から引きずり出されて、ぎちぎちに縛られた。謙吾のような出鱈目じゃない。腕を背中にねじ上げて、縄脱けできないように手首を十文字に縛って、二の腕に縄を巻き留めてから、胸のささやかな膨らみを絞り出すように上下を緊縛して――おかげで、おれの小っちゃな掌からこぼれるくらいに盛り上がったぜ。
ここまでは、まあ、絶対に縄脱けされないための用心にも思えるけど。足は縛らないくせに、なんで腰や股座に厳しく縄を掛けるんだよ。腰をぐるっと巻いて余った縄に大きな結び瘤を作って、それを股座の間に通して後ろへ引き上げられた。縦縄が於女子を割って結び瘤がどんぴしゃの位置に食い込んでくる。ちょっと痛いし、毛羽がくすぐったい。
「これでよろしいですか」
おれに縄を掛けた役人が謙吾にお伺いを立てた。てことは、この縛り方はやつの考えか。
「うむ」
けど、まだ何かするつもりらしい。懐から長い凧糸を取り出して……おれの乳首を縛りやがった。くそ、つんつん引っ張るなよ。痛いし気持ち好い……はずがないだろ。
「こんなものか」
謙吾は満足そうに頷いて。双つの乳首を両端で縛った凧糸の真ん中を指に絡めて引っ張った。

「くっ……」
痛いから、嫌でも前に歩いてしまう。すると、股座を割っている縄が食い込んできて、腰が砕けそうな……くそ、痛いのに気持ち好い。
乳首を引っ張られて、おれは甚振小屋から連れ出された。どころか、ずんずん歩かされて、牢屋敷の表門から外へ引き出された。
牢屋敷は街の端っこにあるし、だいたいが堅気の近づくような場所じゃない。それでも、三々五々と野次馬が集まってくる。
素っ裸で縛られてる姿を見られるんだから、羞ずかしくないわけがない。けど、芝居ではなく本気で羞ずかしがるなんて、忍びの誇りが許さない。それに、いちばん羞ずかしい所は結び瘤が隠してくれてる――てのは強がりだけど。
野次馬が十人を超えるまで待ってから、役人が捨札を持って来させた。

此者　北条家之乱破也
被成敗乱破共々処野晒
米沢惣代官

捨札は地面に立てられずに、おれの背中に括りつけられた。二人の下人が前後に立って、前のやつは乳首の凧糸をぴんと張った。
「さあ、歩け」
びしっと、六尺棒で尻を敲かれた。同時に、凧糸が前へ引かれる。
「んっ……」
しょうこと無しに、おれは歩き始めたんだけど。

「もっと早く歩け」
いちばん後ろで馬に乗っている謙吾が叱咤する。
ばしん。下人がそれに応えて、強く尻を敲いた。
「……」
前を行く下人に体当りをかましてやるつもりで大きく足を踏み出したんだけど。
「あうっ……」
結び瘤にぐりんと於女子を抉られて、腰が砕けかけた。痛いだけなら、まだ我慢できる。気持ち好いとまでは言いたくないけど、雛先を弄られたときと似た妖しい心地までがずうんと突き上げてくる。
「引回と野晒を赦して欲しくば、仲間の居場所なり名前なりを告げろ。真偽を見定めた後に解き放ってやるぞ」
だから竹轡を噛まされてないのか。それとも、絶対に自害しないと見破られてるのかな。
「仲間の報復が怖いというなら、我が屋敷に匿って可愛がってやっても良いぞ」
誰が稚児上がりの変態野郎の玩具になんかなるもんか。それくらいなら、火炙りだろうが八つ裂きだろうが……でも、玩具にされてるうちに、逃げ出す隙を見つけられるかもしれない。一瞬はそうも考えたけど。男でも女でも素っ裸で引き回すくらいは、殺伐とした戦国の世では、どこの国でもやってることだけど。股座に縄を通したり乳首で引っ張ったりなんて悪趣味は（これまで、見たことも聞いたこともないから）どうせこいつの発案に決まってる。そんなやつに可愛がられるなんて、冗談じゃねえぞ。
足を踏ん張って、おれは歩き続けた。痛いのとちょっとくすぐったいのとは、段々に薄

れてくる。女穴の奥がじわあっと熱くなってきて、蜜が滲み出て、それが縄を濡らしてるせいだ。熱くなるのも蜜が滲むのも、それは妖しい心地がどんどん昂ってくるせいだから。

「くう……あっ、あんんん」

呻き声が止まらなくなってくる。

そんなおれを見て、野次馬どもが好き勝手なことをほざいてやがる。

「いくら乱破とはいえ、まだ餓鬼じゃないか。酷い仕打ちよのう」

「何を世迷い言。こっちの戦さ備えを敵に知られてみい。弱い所を衝かれて、殿様が襤褸負けぞ。この米沢まで抜かれるかも知らん」

「家は焼かれ財物は奪われ、男衆は皆殺し、女は辱しめられ、子供は奴婢に叩き売られるぞい」

野次馬は次第に増えてきて、わざわざ追い掛けてくる連中もいる。おれに憐れみの目を向けてくれるやつなんていない。

おれだって、変に同情なんかされたくない。おれは一人前の風間忍びだ。忍びってのは、味方からさえも薄気味悪がられ、卑怯だ戦場(いくさば)の穢れだと蔑まれる。むしろ、忍びはそれを誇りに思う。だから、敵地の土民ごときに罵られようと、蛙の面に小便だい。

「股座に縄を食い込ませて乳の紐で引っ張って。まだまだ仕置が足りねえ。おおい、お役人よう。その棒っ切れは飾りかい。びしびし、ぶっ叩いてやれよお」

先頭を歩いてる役人が振り返って、おれを後ろから追い立ててる下人に向かって頷いた。

ばちん。肩に六尺棒が打ち下ろされた。

「くっ……」

ばちん。ばちん。ばちん。ばちん。

肩も脇腹も尻も股も滅多打ちにされた。さすがに堪えて、その場にうずくまって身をかばった。途端に。

ひゅん、ばしっ。しゅっ、びしいっ。

左右から石礫が飛んできた。印字打ちは武技だけど子供の遊びでもある。だから、どいつもこいつも年季を積んでて狙いは正確だ。丸めた背中にも尻にも脇腹にも腿にも、びしびしと石礫が食い込む。

「うっ、ぐうう、痛い……」

こんなにも憎まれているんだと、分かってるつもりだったけど、涙が滲んでくる。

びしっ！

「きゃあっ……」

こめかみに食らって、目の前で火花が散った。

「大概にしておけ」

馬が駈けてきて、おれを跨いだ。

「後程、存分に鬱憤晴らしをさせてやる。今は行列を妨げるでない」

率先しておれを甚振ってきたやつが、おれを庇ってくれた。と思ったのは早とちりだった。

「野晒になれば、この程度では済まんぞ。いい加減に仲間を売ったらどうだ」

こいつ、ほんとにおれを白状させたいんだろうか。仲間を売れだなんて、もっと言い様があるぞ。

言い返すのも莫迦ばかしくて、おれは無言でうずくまっている。
「そうか。強情な餓鬼だな」
謙吾が馬上で動く気配があった。
ぶしゃあああああ……全身に生温かい水を浴びせられた。馬の小便だ。顔にも容赦なく降り注ぐ。大の男の立ち小便の何倍もの量で、全身ずぶ濡れ。
ぽくぽくと、人を小馬鹿にしたような蹄の音が後ろへ下がって。
「そら、立って歩け」
敲くのもばっちいとばかりに、脇腹を六尺棒の先で小突かれた。
ぐずぐずしてると、今度は馬糞を落とされるかもしれない。馬糞は踏んづければ足が早くなるからと、五つ六つの頃はわざわざ探していたくらいだけど。これ以上に辱しめられたくはないし、謙吾のやつを悦ばせるのはもっと厭だから――身体の痛みを堪えて立ち上がった。痣だらけ馬の小便まみれの身体を引きずって歩き出した。
謙吾の一喝のおかげで二度と印字打ちを食らうことは無かったし、六尺棒を汚すのを下人も憚ったんだろう。野晒の場に引き据えられるまで、そんなに酷いことはされなかった。
酷いことをされるのは、これからだった。
野晒の場は、獄門台の真ん前だった。獄門台には、幸兵衛小父とタヨ小母の首が並べられていた。爆薬を背負っていたので、首から上は綺麗に千切れ飛んだらしく、そんなに傷付いていなかった。
おれはふたりに、心の中で謝った。せっかく囮になってくれたのに、不覚にも捕らえられてしまって、まだ逃げ出す算段もつかない。でも、諦めるもんか。おれはふたりの首に、

改めて誓った。
突っ立っているおれに、二人の下人が手桶で何杯も水を浴びせた。綺麗にしてくれるのは有難いんだけど、それはおれの身体をつかんで酷いことをするためだと、すぐに分かった。
獄門台の手前に杭が打ち込まれた。一寸五分くらいの角材（対角だと二寸を超えるぞ）で、先端は尖っている。
おれは背中の捨札を抜かれ腰から下の縄も解かれて、後ろ手の緊縛はそのままに、杭を跨がされた。
馬から降り立った謙吾が乗馬鞭を片手に、おれの斜め前に立った。正面に群がっている野次馬に、おれの無様な姿を見せつける位置取りだ。
「そこにひざまずけ」
謙吾が乗馬鞭で差したのは、おれの足元の杭。
「……」
冗談。このままひざまずいたら、杭が於女子に突き刺さっちまう。多分、五寸やそこらは突き抜ける。それをちゃんと計算したうえでの、この杭の長さだろうから……こいつ、冗談なんかじゃなく、まるきり本気で、おれを串刺しにしようとしてる。
「杉下様のお言葉に逆らうつもりか」
役人の合図で、二人の下人がおれの後ろへまわって、肩を押さえ込む。
くそ……こんな薄汚れた杭なんかに、おれの新鉢を割られてたまるもんか。
おれは女忍びでくノ一の術も身に付けてるから、祝言の夜に夫となった好いた男と――

なんて甘っちょろいことは考えたこともない。妾になって狒々爺いに散らされるか、上杉家の奥に潜り込んで熟れた肌をもて余してる奥方に張形で貫かれるか、場合によっては遊郭で遊び女に化けて……そんなところだと諦めていたけれど。野次馬に見物されながら、地面から生えてる杭が最初の相手だなんて……

「いやだ。堪忍してくれよおお……！」

駆引きとか芝居じゃなく、本気でおれは抗った。けど、大人ふたりの力に敵うはずがない。じりじりと押さえ付けられて、ついにがくんと膝が曲がった。

「おっと、ずれてるな」

足で尻を押されて、杭の先端が於女子を割り込んで……女穴に突き刺さった。

びききっと引き裂かれる鋭い痛みが、脳天まで突き抜けた。

「いやだああっ……こんなのが初めてだなんて……」

惨めとか悔しいってよりも、もったいないって思った。けど、未通女でいたところで、今さら意味が無いのかもしれない。この地で偉いやつの妾になるのは、もう無理だ。なんとか逃げ出して御館に戻っても、一度しくじった忍びに次の仕事があてがわれるだろうか。下忍たちの慰み者にされて、誰のかも分からぬ種を仕込まれて、産んだ子を育てられるのも三つくらいまで。忍びに仕込むために取り上げられて……

さらに鋭くて重たい痛みが広がって。とうとう、両膝が地に着いた。両膝を左右に引き広げられて、足首を重ねて縛られた。

この姿勢から立ち上がるには、片足を前に出して膝を立てなくちゃならないのに、両脚を揃えて縛られたら身動き取れない。なのに、いっそう脚を左右に広げられて、膝の裏に

通した竹竿に縛り付けられた。
「痛い……やめてくれよおお」
杭の先が女穴の奥に突き当たって、ぐううっと押し上げてくる。今にも、ぶつっと音を立てて突き破られそうになってるのが、なんとなく分かった。
杭を伝い落ちる血が、衆目に晒される。
「この夥しい血は……さては、生娘だったか」
謙吾が意外そうな声を上げた。
おれくらいの年頃の娘は、たいてい生娘だぞ。くノ一の術を使う女忍びだから、当然に、ここも鍛えてると思ってたんだな。
「まあ、良いわ。いっそう野晒が心身（しんみ）に堪えるであろうさ」
おれの右側に、背中に括り付けられていた捨札が立てられた。
「三日ばかり、そうしておれ」
謙吾がとんでもないことを言う。
「つらければ、いつでも腰を落として良いぞ。腹の中まで杭が突き抜け、労せずして自害できる」
とんでもないことの追い討ち。
「もっとも、腸（はらわた）が腐って膿が身体じゅうにまわり、全身が真っ黒になって高熱を発して、死ぬまでに一日かそこらは悶え苦しみ抜くであろうがな」
そんなことを言われたら、死ぬ気でいても死ねなくなる。おれは端から死ぬ気なんてないけどな。

小父と小母の獄門首の前で、於女子を貫かれながら三日間の野晒。考えただけで、背筋が凍ってくる。でも、それだけじゃ済まなかった。

おれの横に文机二つ分ほどの台が置かれて、そこに様々な小道具が並べられた。折弓が二本、短い木刀が二振、朽縄が数本、矢床は一丁と畳針が十数本、そして大皿に山盛の松葉……

下人が新たな捨札を持ってきて、文面をおれに見せた。予想通りのことが書かれてあった。

とがにんのせっかんはかってしだい
ただしじまえのどうぐははゆるさず
てあしまらはこのかぎりにおよばず
めをつぶすことゆるさず
ほねをおることゆるさず
にくをちぎるもふかなり
ころすことろんがいなり
ばんにんのさしずにはしたがうべし
よねざわそうだいかん

ゆるさずが多くて涙が出るぜ。生かさず殺さずで嬲られ続けなきゃならないってこった。

拷問道具の後ろに捨札が立てられて、役人も下人も五間ばかり離れた掘立小屋のとこまで引き下がった。

それでも野次馬は遠巻きに眺めるだけで、おれを虐めに来るやつはいなかった。

そうだろうと思うぞ。一年ばかり前に、奉公先の主人夫婦を殺して銭を奪った極悪人が、鋸引の刑に掛けられたけど。見物人は多くても、鋸で科人の首を挽く者は何十人にひとりだった。でも、居ることは居た……

小半時ほどは、じわじわと野次馬が増えるばかりで、誰もおれに近づこうとはしなかった。

それで、謙吾のやつが業を煮やした。つかつかと五間を詰めよって来て。

「おまえら。餓鬼の見た目に騙されるな。昨夜の大捕物は知っておるであろう。養い親が火薬で吹き飛ぶのを目眩ましにして、ひとりで逃げようとした恩知らず情知らずの人非人ぞ。懲らしめてやらずして何とする」

折弓を手にすると。

ばしん、ばしん。両肩を交互に敲いた。

昨夜の責めに比べたら、ちょっと痛くてちょっと痒いだけだ。でも、無言で耐えたのが拙かった。

折弓のぎざぎざにささくれている側を、盃ひとつ分の膨らみに押し付けて、ぐりぐりと抉られた。

「きひいい、痛い……」

ちょっとだけ大袈裟に呻いたら、見破られた。

「芝居は無駄じゃ。忍びが、これしきで音を上げるはずもなかろう」

びしっ、びしっ。びしっ、びしっ。立て続けに二往復、膨らみを薙ぎ払われた。

「くううっ……」

ぎざぎざに引っ掻かれて、赤い筋が何本も刻まれた。
昨夜はさんざん打ち敲かれたけど、ささら竹だったから、ぼやけた薄い痣にしかなっていない。それだけに、この引っ掻き傷は目立つ。
おれが傷物になったから心安くなったのか、偉いお侍様が範を示されたからなのか。謙吾が小屋へ退くと、十人ほどもが押し寄せて来やがった。
「そうだよな。こいつは、あどけない女(あま)っ子なんかじゃねえ。人外魔性の忍びだ」
「そうともよ。見ろ、股座を串刺しにされて血を流しながら、けろりとしてる。普通なら泣き叫んでるぜ」
けろりとなんか、してねえよ。これくらいで涙を見せちゃ風間忍びの名折れだから、堪えてるんだ。
「じゃあ、俺たちの手で泣かせてやろうぜ」
くそ、やれるもんなら……負けん気を起こすから、余計に甚振られるんだ。三日間の長丁場を持ち堪えられないぞ。
台にわらわらと手が伸びて、たちまち空っぽになった。娘ひとりに婿十人。強がってみても、膝が震えてやがる。
「待て待て。そんなに大勢は無理だ。左右に分かれて、前に二人、後ろに二人ずつだ」
番人が仕切って、四人がおれを取り囲んだ。
「敲くなんざ、生易し過ぎるぜ」
右の乳首を矢床で挟まれた。鉄の冷たさにぴくっと背筋がふるえたのは、おまけみたいなもの。指で抓られるのとは桁違いの強さで圧し潰される。

「ぎひいいいっ……痛い。堪忍してくれよう」
泣けば手加減してもらえるかと思って痩せ我慢はやめたんだけど。
「嘘泣きには騙されねえぞ」
「ぎゃはあっ……！」
ぎりりと半回転ほども捻られた。芝居抜きで悲鳴を上げた。泣いても泣かなくても甚振られる。
「おいおい。千切るなよ。法度を破るやつは、そこに並べて晒すぞ」
番人が止めてくれたから、乳首を捻じ切られずに済んだ。
番人に脅されたせいで、後に続いた三人の折檻は、そんなに厳しくはなかった。反対側の膨らみを朽縄で何発か叩かれ、木刀と折弓で尻を敲かれた。どれも痩せ我慢出来たけど、「あうっ」とか「ひいい」とか、ちょっとだけ鳴いておいた。
次の四人は、木刀と矢床と畳針と松葉を小分けにしたのと。
木刀で尻を敲かれ、矢床で脇腹の肉を抓られた（だけで済んだ）。松葉は火を点けて燻すんじゃなくて、口に押し込まれかけた。番人が止めてくれたけど、
「食わしちゃいけないって書いてねえだろ」
押し問答になって、これも謙吾の采配で、
「口をふさぐと自白できぬから不可とする。ただし触書にある如く、手足と魔羅はこの限りに及ばず」
おれは、それでいいぜ。於珍宝なんか突っ込んでみやがれ。食い千切ってほんとに食ってやる。

この三人はどってことなかったけど、畳針を両手に持ったやつは謙吾も左内も顔負けの（と、そのときは思った）ことをしやがった。おれの正面に座り込んで、串刺しにされた血まみれの於女子に畳針を近づけて。下から上へ撥ね上げるようにして、雛先をほじくり出した。左手の畳針を逆さに持ち、頭の平たい所に雛先を乗せて親指で押さえ込んで――右手の針を突き刺した。

「ぎゃあああっ！」

痛いなんてもんじゃない。股座で焙烙弾が炸裂して、その衝撃が脳天まで突き抜けた。

「ぎひいいい……」

雛先を貫いた針が、於女子の上でふっくら盛り上がってる下腹に突き刺された。雛先の磔だ。

ずきんずきんずきんと、鋭い痛みがいつまでも続く。

二本目の針が真横から雛先に近づく。

「御願いだ。もう赦してくれよお……やめろ、やめて……ぎびひいいいっ！」

雛先を十文字に縫われて……おれは啜り泣くことしかできない。

雛先を十文字磔にされたままのおれを、三組目の四人が取り囲んだ。見れば、四組目も五組目も順番待ちをしてる。

苦痛を堪えたら強情だって思われて手酷くされるし、ほんとに泣いても嘘泣きだって決めつけられて甚振られる。気を失っても、山盛りの松葉を燻されて正気づかせられるんだろうし。

忍びってのは、侍なんかと違って意地とか名誉とかは考えない。冷静に彼我の力量を測

って、勝てないと見極めれば遁走にかかる。脚を斬られないようにみずから進んで腕を切断させるくらいのことだってしてのける。それでも逃げられないとなると、捕らわれて拷問されるよりも自死を選ぶ。だけど、おれは自死するなと厳命されている。どうすりゃいいんだよ……分かってるさ。息絶えるまで、じたばたあがきながら甚振られ続けるしかないんだ。

「うううう……痛いよ。もう、やだよ。赦してよお」

半分はほんとだけど、半分は同情を誘う芝居を交えて、おれは啜り泣き続けた。

そんなのは、ちっとも役に立たなかった。

折弓で胸の引っ掻き傷を三倍にも増やされ、木刀を何度も腹に突き入れられた。

「うげっ……げぶふっ」

酸っぱい水を吐いて、身を二つに折って悶え苦しむ。その動きで杭に女穴を抉られて、激痛と出血が増える。

後ろにとりついたやつは、もっと残忍だった。両手でおれの腰をつかんで、膝が浮くまで持ち上げてから、どすんと落とした。

「いぎゃあああっ！」

びききっと、また女穴が裂けた。

もうひとりも、持っていた矢床を捨てて、おれの尻をつかんで左右に揺する。女穴の中で四角い杭が暴れまわって、滅茶苦茶な激痛がおれを揺さぶった。

「ひいひい……ひいいいい」

啜り泣きが止まらない。誰も同情してくれない。どころか、面白がってやがる。

次の連中は、もっと残酷だった。前のやつらに負けまいと競ってやがるんだろうか。おれの左右にしゃがみ込んだ二人は、示し合わせて畳針を両手に持っていた。それで、左右の乳首を十文字に縫った。

ぶつっ……

「ひいいい、痛いっ」

きっちり四回、悲鳴を上げさせられた。

後ろの二人は、木刀と矢床。真っ直ぐ立てると地面につかえるので木刀を斜めに尻穴にあてがって、突き上げながら立てていく。於珍宝より細身だけど、斜めにこじられるし、ちょっとも柔らかみが無いから、何倍も痛い。矢床で尻肉を齧られる痛みなんか、ささやかなものだった。

「そこまで」

謙吾の声が、天から降り注ぐ仏様の慈悲に聞こえた。

「少し休ませてやれ。息も絶え絶えの小娘を痛めつけても面白くなかろう」

休ませて元気を取り戻してから、また甚振ろうってんだろうけど、そんな先のことなんか、知らない。今は赦してくれるんなら御の字だ。

こういうのを朝三暮四っていうのかな。博士に聞いてみよう。

博士ってのは、里一番の神童のこと。八つで四書五経を諳じて六韜三略もお茶の子だった。なんと、算木まで使いこなしてた。こういうやつは、どでかい殿様の知恵袋その実大木みたいな草になれる。

おれだって、そんじょそこらの餓鬼なんか足元にも及ばないくらいの知識を身に付けて

る（たいがいは悪知恵だけどな）けど、博士と比べりゃ月と鼈（すっぽん）の卵。
その代わり、博士は抜けてるとこもあった。おれが粉掛けても、ちっとも気づかないでやんの。天は二物を与えずってとこかな。
博士が博覧強記なのも、おれが大人顔負けの悪知恵に長けているのも、天は二物ってやつだな。山の高さの計り方だの、唐天竺までの道程（みちのり）だの、南蛮の青史とかまで覚えなきゃならないなら、益体もない知識で頭が一杯になって、ほんとうに役に立つ知恵が弾き出されちまうぞ。
――謙吾が折檻を止めてくれて安堵したんだろう。おれは長いこと気を失っていたらしい。四年も五年も昔の里の夢を見ていた。
気がついたら、陽は冲天に達していた。野次馬は、まだ十人の上から居るけど、ちょっと見物しては立ち去り、すぐに新手が三々五々とやって来る。
謙吾も左内も役人も、とっくに居なくなってた。番人がひとりだけ、退屈そうにしている。おれが正気付いたのを知っても、野次馬をけしかけたりはしないでいてくれるのが、心底ありがたかった。
新たにやって来た三人の野次馬の中に、珍しくも女の人が混じっていた。年の頃は三十路を行くや行かず。地味な身なりだから遊び女でもなさそう。人垣の前までしゃしゃり出て、おれの串刺し血まみれの股座を見ると、袂で口をおおって顔を背けた。けど……だらんと垂らした左手の先で、指がくるくるっと動いた。
風間の合図だ。
仲間が捕らえられたので、様子を見に来たんだろう。野次馬根性でも同情でもない筈。

そんな浮わついた忍びは居ない。
この機会を逃してはいけない。
「こゐけ」
小さくつぶやいた。「ゐ」を「い」と聞き間違えられないように、「ぅい」としっかり発音。
女の人が、そっぽを向いたまま、小さく頷いた。
「れふれたぬゐてんゆほていやしおせゐゑあさぬ」
「何を言っとるのか」
番人が聞き咎めたので、適当に誤魔化した。
「いてえよほ。かにしてくりょんよお」
「おとなしくしておれ。また折檻の人手を呼び集めてやろうか」
六尺棒で腹を突かれて、おれは呻いた。顔を上げたとき、女の人はおれに背を向けて立ち去るところだった。
すこし離れたところにうずくまっていた乞食が、つっと立ち上がって――でも、女の人とは別の方角へ歩き始めたから、関係はないだろう。
おれがつぶやいたのは暗号だ。『ふうま』をいろは四十八文字でひとつずつ後の文字に置き換えると『こゐけ』となる。
いろはにほへとちりぬるを
わかよたれそつねならむ
うゐのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせすん

ふ→こ、う→ゐ、ま→け。暗号文の最初には、必ず『ふうま』を付け足す。本文もこの流儀で置き換えるって伝えるための鍵だ。

もっと複雑にするなら、たとえば『このこ』では、『ふうま』を一文字二文字三文字とずらしてある。次からは一二三の繰り返し。『まのま』だと、前へ二文字、後へ二文字、次は置き換えない。

こんなのをすらすらと頭の中で組み立てられる者もいるけど、頭陀襤褸縒々（ずだぼろよれよれ）の今のおれには無理。なので、単純な一文字ずらし。元の文は、こうなる。

たけたよりうえすきにえんくみのもうしてあり

これで、おれは半分くらいは務めを果たした。半分というのは、あの人が無事に越後領を脱けて風間の御館へ帰参できるかは、おれには分からないからだ。

だから。おれは自害なんかせずに、逃げ出す機会を狙い続ける。こんだけ非道い目に遭わされていると、このまま死ぬのは死に損に思えてくる。なんとしても生き延びて、謙吾どもの鼻を明かしてやりたい――なんて雑念は、忍びとして失格だな。

夕刻になると、仕事を終えたやつとかが集まり出して、仲間にけしかけられて、おれを甚振るやつもだんだん増えてきた。

畳針が何度も抜かれては、急所に繰り返し突き刺された。乳首と膨らみの根本とを二段に十文字に縫われて、その上から木刀で敲かれたときは、悲鳴で喉が破れて血を吐いた。

それでも二度と気を失わずに、暮六ツの鐘はこの耳で確かに聞いた。

陽が暮れると野次馬も居なくなった。

番人が交代して、そいつは小屋から薪を運んで来て焚き火を熾した。夕闇の中に、傷だらけの肌が照らし出された。あちこちが赤く染まっているが、どれが焚き火の照り返しで、どれが肌にこびり着いた血なのか、判然としないのは目が霞んでいるせいだろう。

目よりも。喉がひりついている。

「水を……飲ませてくれよ」

言うんじゃなかったと、すぐに後悔した。

「たっぷりと飲ませてやるぜ」

番人がおれの前に立って、股引をずらした。首の後ろで結わいている割褌を解いて、於珍宝をひり出しやがった。くそ、まだ甚振り足りないのかよ。

「ほら、口を開けろや」

厭だよ。

番人は、半勃ちしてるやつをおれの顔に向けると。

ぷしゃあああ……長々と放尿を始めた。

冗談じゃねえぞ。どうしても飲み水が手に入らないときに自身の尿を飲んで渇きを凌ぐのは忍びの術にあるけど、それとこれとは別だ。他人の、しかも敵の小便を飲むなんて真っ平御免だ。忍びとしては不覚悟かもしれないけど、おれの中に残ってる人がましい部分が、金切り声で叫んでる。

おれは目をつむり口を引き結び息を止めて、真正面から顔に小便を浴びた。下手に顔をそむけたら、台の上の小道具を使われるに決まっている。

「飲みたくねえなら、それでもいいさ。三日間くらい飲まず食わずでも死にゃあしねえや」

番人は、あっさり引き下がってくれたけど。
焚き火は、おれの身体を暖めてくれるほど近くない。夜が更けて身体が冷えてくると、今度は小便を催してきた。考えてみると、昨夜から一度も覚えがない。きっと、気絶してるときに漏らしてるんじゃないかな。
だから、二度も三度も同じだ。わざと気軽に考えて――膝立ちで串刺にされたまま漏らした。番人に頼んだって、まさか厠へ行かしちゃくれないし、意地悪をされるだけだ。
――折檻の傷は痛むし喉はひりつくし。それでも、身体は疲れ切って心は打ちのめされて。昨夜はほとんど眠ってないしで。いつしか、底無し沼に引きずり込まれていくように、おれは眠ったのか気を失ったのか。
痛い……それまでの引き裂かれるような女穴の痛みと違って、鋭く差し込むような激痛を感じて、おれは目を覚ました。目の前に地面が見えていた。俯いているせいだけど、それだけじゃなくて、身体全体が前に傾いでもいる。激痛も女穴の入り口ではなく、もっと奥のほうだ。
このまま前に倒れたら於女子がほんとに引き裂かれちまう。身体を起こそうとすると、もっと痛くなった。けど、腹を突き破られてる感じはしない。もうすこしだけなら杭を咥え込める余裕があると、直感で分かった。
赤ちゃんが宿る子袋は女穴のもっと奥にあるって、タヨ小母さんに教わったけど――身体が前へ倒れた拍子に、杭の先がそこに刺さったんじゃないだろうか。とすれば、腸（はらわた）に突き抜ける恐れが減った。けど、子袋が傷付いたら餓鬼を産めなく……阿呆め。そんな遠い先の心配をしてる場合じゃない。今を生き延びることだけを考えろ。

せっかく、杭が女穴の奥の子袋に突き抜けてくれたんだから、どんなに痛くてもそこから抜けないように、そろそろと身体を起こして、きちんと両膝を立てた。

ふうう。杭の先が女穴の奥に当たってたときよりも、ちっとは楽になった……ような気がしないでもない。

にしても、薄暗い。真夜中の暗闇でもないし、夜明け前の微かな明るさとも違う。

首を傾げていたら、ぽつんぽつんと肩に雨粒を感じた。そうか。今は梅雨のさ中だから、雨くらい降るよな。

夜が明けるにつれて、雨は本降りとなった。ありがたい。天を仰いで口を開けていれば、すこしは渇きを癒せる。それだけじゃ足りなくて、首をひねって舌を伸ばして、濡れた肩もぺろぺろ舐めた。番人は面白そうに眺めてるだけで、咎めはしない。

雨だとさすがに、街外れの晒場までやって来る物好きは少ない。来るというよりも、他の用事で通りかかるとか寄り道とか。だから、足を止めておれを甚振ろうなんてやつはいなかった。

だけど、お天道様が甚振ってくれる。降り続く雨でぐしょ濡れくらい平気だけど、身体がどんどん冷えてくる。温かい小便をぶっ掛けてほしいなんて、本気で思ったりする。もちろん、番人にお願いするほど落ちぶれちゃいねえよ。

午の刻、九ツの鐘が鳴っても、まだ雨はやまない。そのうち、ものすごく寒くなってきた。風はまだ生温かいのに、寒くて身体がぶるぶる震える。胴震いで杭が於女子の中で暴れて、また新たな激痛に苛まれる。

「ずいぶんとおとなしいな」

いつの間にか、蓑笠を付けた謙吾が目の間に立っていた。雨音がしてるとはいえ、足音を聞き逃したとは、忍びとして不面目極まりない。
「震えておるな？」
謙吾が手を伸ばして、おれの額に当てた。
あ……ひんやりして気持ちがいい。
「これは、すごい熱だ。おまえ、このままでは死ぬぞ。楽にして欲しければ、早く白状せい」
言ってることが無茶苦茶だ。楽にするってのは、おれを殺すってことだろ。
「熱なんか、ないやい。寒くってしょうがないだけだ」
謙吾は、むっとした顔になった。
おれの早とちりだったかもしれない。楽にするって言葉に殺すって意味は無くて、野晒を取り止めて養生させてやろうってつもりだったのかな。だとしても『好意』を受け容れてなんか、やるものか。
謙吾が台の上から濡れた朽ち縄を取り上げた。
「そうか、寒いのか。ならば、暖めてやろうぞ」
朽ち縄を振り上げて、おれの胸を目掛けて振り下ろした。
ぶゅん、ばじゃあん！
「きひいいっ……」
水をたっぷり吸い込んだ朽ち縄は、木刀よりも痛かった。撓って身体に巻き付くから、一撃で右の膨らみも左の膨らみもひしゃげて、胸全体を重たい激痛が奔り抜けた。

ぶゅん、ばじゃあん！　ぶゅん、ばじゃあん！　ぶゅん、ばじゃあん！
ぶゅん、ばじゃあん！　ぶゅん、ばじゃあん！　ぶゅん、ばじゃあん！
胸だけじゃない。肩も腹も腿も滅多打ち。後ろに回って背中も尻も打ち据えられた。
おれが悲鳴を上げたのは、最初の数発だけ。あとは、叫ぶ気力さえなくなって。
「くうっ……痛い……」
弱々しく呻くだけになった。
二十発か三十発か、数えてたわけじゃないから分からないけど、たぶん五十まではいってないだろう。敲くたびに朽ち縄が綻びてだんだんに千切れて、敲くに敲けなくなって、謙吾は短くなった朽ち縄を捨てた。
「どうじゃ。すこしは暖まったか」
寒さよりも痛みが勝ったせいか、胴震いは止まっていた。もちろん、お礼なんか言うはずがないぜ。
「へん。おまえの細腕で敲かれたって、ちっとも効かねえやい」
お礼を言わないからって、憎まれ口を叩かなくてもいいんだけど。怒らせたらもっと甚振られて、ほんとに楽になれるかもしれないと――まったく考えなかったわけじゃない。
けど、謙吾は予想外の挙に出た。
「そうか。ならば、内から暖めてやろう」
腰に吊るしていた瓢（ふくべ）の栓を抜いて、おれの口に突っ込んだ。
「飲め。毒は入っておらん」
敵の情けなんか受けたくはないのに。雨を舐めたくらいじゃ、渇きは焼け石に水だ。瓢

が傾けられて中身が口の中に注がれると、何も考えずに飲んじまった。
つうんと酒の匂いがして、その中に生臭い味が混じっている。
「うげ……」
吐き出そうとしたら、手で口をふさがれた。
「飲めと言ったぞ」
どすんと腹を蹴られて、思わず飲み込んじまった。
喉が灼けて、一拍を置いて胃の腑がかあっと熱くなった。すごく強い酒だ。これは話にしか聞いたことのない、火酒ってやつか。あれは濁り酒よりも味が無いそうだけど、これは……煎じ薬みたいな臭いと味だ。
「けふっ……けふん」
咳が治まるのを待って、謙吾はさらに火酒をおれの口にあふれさせる。毒を食らわば皿まで。唇の端からこぼしながらも、次々にそそがれる酒を飲んだ。
腹の中で火が燃えてるみたいだ。おかけで、悪寒は消し飛んじまった。その代わり、なんだか天地がぐるぐる回り始めた。
くノ一の術のひとつとして、酒を口に含んだこともある。口移しで男に飲ませるんだ。おれも、幸兵衛小父に飲ませた四半分くらいは飲んでしまったけど、ぽわんといい気分になったくらいで、こんな目眩は起きなかった。あのときとは、飲んだ量も酒の質も違う。
「残りはくれてやる」
謙吾が瓢を番人に放り与えた。
「へい、ありがたく頂戴いたしますです」

恭しく押し戴いて、ちょこっと口を付けて。
「ひええ、こりゃあ……蝮酒ってやつでございますか」
「高麗人参も入れてある」
「もったいない。なんでまた、こんな高価な酒を敵方の乱破なぞに？」
「死なれては困る。こやつの口から、なんとしても仲間の居所を聞き出さねばならんからな」
そうか。これも生かさず殺さずってやつだ。死ぬほどの目に遭わせときながら、命永らえる手立ても講じるってことか。ありがたいね。殺されないうちは、逃げる隙を何度でもうかがえるって寸法だ。今のところ、その隙がまったく見つからないし……天地がぐるぐる回って、とうとう頭の上に降って……
はっと気がつくと、夜になっていた。雨も上がっている。まだ頭がふらふらしてる。身体が燃えるように熱い――のは、悪寒よりはずっとましだぜ。
それに。気のせいか於女子を貫いてる杭が、ちょっとだけ細くなっている感じがした。杭に抉られないように注意しながら上体を傾けて杭の根元を覗き込むと、茶色い塊が幾つか転がっていた。気を失っている間に粗相をしたんだ。糞が出た分だけ腸が小さくなって、於女子が広がったんだろう。
おれは忍びだ。生きるために糞小便を垂れ流したって、ちっとも羞ずかしくない。そう、おのれに言い聞かせて、惨め極まりない中ですこしだけ苦笑した。
おれ、生き延びるつもりでいやがる。そうだ、頑張らなくちゃ。あと一日頑張れば、野晒は終わる。そう考えた途端、背筋を冷たいものが駆け上った。野晒が終わったら、拷問

が始まるに決まってる。今だって二六時中の拷問なのに。

三日目は曇り空。昨日は人が来なかった埋め合わせをするかのように、巳の刻前から野次馬が集まり始めた。けど、小道具と「とがにんのせっかんはかってしだい」の捨札とが片付けられていたので、おれは甚振られずに済んだ。謙吾が指図していたのか、野次馬がおれに一間まで近づくと、番人が追い払ってくれた。おかげで、初日よりも二日目よりも安楽に過ごせた。

とはいえ、昨日は死にかけていたんだ。三日間も膝立ちを強いられて、いっそ膝を屈して座り込んでやろうかと、何度も考えた。でも、できなかった。すぐには死ねない。腸を突き破られて、それが腐って全身に毒が回って……どんな拷問よりも苦しそうだ。

遠くから聞こえる暮六ツの鐘とともに謙吾が下人を従えてやって来て。両側から肩をつかんで串刺しから牛蒡抜きにされて。おれは安堵のあまり、またしても気絶しちまった。

それでも。襤褸屑と変わりなくなったおれの身体が牛の背に括りつけられて牢屋敷へ運ばれたのを、なんとなくは覚えている。

※続きは製品版でお楽しみください。

後書き

この作品は、ＰＩＸＩＶでＷＩＬＬ様からいただいたリクエスト（有料）に基づいて執筆しました。奥付に２０２２年０７月とあるのは、リクエストへの納入時期です。

リクエストへの縛りは要点だけを記せば

・ロリマゾシリーズ（Ｕ１５／ヒロイン一人称）

・３万５千文字（１００枚）程度の短編

この２点です。

いただいたリクエストは、下記のとおりです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＊ストーリイのリクエスト

ロリマゾくのいちが尋問のため様々な拷問を受ける

＊時代設定のリクエスト

戦国時代前後の日本

＊シチュエーションのリクエスト

戦国時代を舞台とした忍者物

＊キャラ設定

・少女

Ｘ１～１Ｙ歳ほどの少女。年の割に小柄だがはしっこく、機転が利くため、草として使わ

れていた。敵国で捕縛され拷問を受けるうちにマゾに目覚め、口を割らないために拷問に耐える、のではなく、拷問されるために口を割らないようになっていく。

・武士

少女を捕縛した男。情報収集のために少女を拷問していたが、やがて拷問という行為そのものに溺れていく。（複数名、あるいはモブでも構いません）

＊人間関係のリクエスト

ロリのマゾヒストと、ロリコンのサディストによる拷問

＊特定の責めのリクエスト

内容は基本的におまかせしますが、以下はお願いできますでしょうか。

・乳首と陰核を抓りあげられ責められる少女

また、可能であれば以下もお願いします。

・全裸で市中を引き回される少女（悪意や敵意を向けられる感じで）

Ｒ１８／ロリ／拷問／晒し者／ＣＭＮＦ／ふくらみかけ／羞恥

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

まずお断わりしておくのが『女忍び』と『くノ一』の違いです。本作品中では『くノ一の術』として、女忍が女の武器を行使する、いわば房中術として扱っています。これが本来の意味だったとウロオボエスの神話です。太平の世が続いた江戸時代（それとも近年の講談本？）で、言葉の意味が色々と変遷しているのです。

その言葉ですが。実は『陰核』とは元々は金玉のことであったとか。ネット検索だけで元文献には当たっていませんから、不確実ですが。そういったわけで、戦国時代（中世末期）らし

い単語をあれこれ、まあ大半は丁稚揚げですけどね。於女子とか雛先とか。
守備範囲の江戸時代よりも昔ですから、時代考証には留意しました。『バンザイ』なんて江戸時代でも使えません。興味ある読者はググるなりビングるなりヤフるなり。
単語はお遊び半分ですが。お遊びといえば、舞台設定もそうですかしら。
これまで（特に時代劇では）場所も登場人物も架空のものでしたが、今回はなんと、上杉謙信統治下の越後領です。最初は、それっぽい地名を丁稚揚げるつもりでしたが、なんとなく三権分立もとい三強鼎立の舞台設定にして、必然的に上杉 vs 武田 vs 北条になってきて。ロリコンサディスト武士を上杉謙信のお稚児さんにしてしまって。こういうお話になりました。上杉謙信ホモ説はおろか女人説まであるのですから、ついでに養子二人の前に、（弱冠に達して）寵愛を失いかけている美青年くらいは居ても可笑しくないでしょう。
衆道の青年ですから、体形が稚児に似ている（ツルペタ）ハルに欲情するのです。
実は忍者にしても、最初は漠然と考えていました。甲賀や伊賀じゃ面白くないし、得体のしれない忍者集団といえば風魔かなとは、設定の当初から考えてはいましたが。調べてみて、北条と風魔が結びついていると知って、まさに天啓は舞い降りた。
上杉には軒猿がいました。個人名らしいですけど集団にしました。
そして。オーラスの拷問です。ごちゃごちゃ甚振らずに、さっさと『裏切者』として処断すべきなのに、なぜ自白を強要するのか。ここで、第三の忍者集団が北条家に売り込みをかけていて――というのを、土壇場で丁稚揚げました。この忍者集団は、歴史で習う『部の民』です。影働きをする部の民ですから影部です。筆者がＫＧＢを知ったのは『ゴルゴ１３』ですが、そのときから暖めていたギャグです。チョイ役ですが、とうとう陽の目を見ました。

にしても。この作品の直前に仕上げたのが『濡墨』です。時代劇の拷問のマゾのと、設定がかぶりまくりです。ので、ついつい『濡墨』に引っ張られて、責めの内容もかぶり気味です。蜈蚣でなく蚯蚓とか。

あと。過激な拷問としては、目を潰すとか腕を叩き切るとかもありそうですが。それではハッピーエンドになりません。なによりも、筆者は（膜と淫毛と包皮以外の）欠損を忌避します。そこで、大慌てで歯止めを設定する羽目になりました。「窮鳥懐に入らば煮て食おうと焼いて食おうと」以下のシーケンスです。唐突ですし論旨が取っ散らかっています。奇異に感じる読者がおられましたら、右の事情を御賢察ください。

※この作品はフィクションです。実在する／した如何なる人物・地名・年齢とも関係はありません。

※忍びの危機管理能力に関する一文（冷静に彼我の力量を測って、勝てないと見極めれば遁走にかかる）は、隆慶一郎『花の慶次』を参考にさせていただきました。

２０２２年０７月

著　者：濠門長恭
表紙絵：藤間慎三
発　行：ＳＭＸ工房
ブログ：https://goumonchoukyou.jp/